

(抜粋ノート) ホジスン『現代制度派経済学宣言』

この学問(経済学)の不完全な状態を探り、しばらく学問的ゲームから身を引いて、通常、好都合にも無視されているような核心的問題のいくつかと取り組んでみる義務は、すべての経済学者にあるだろう。前書き

中心的な議論の一つは、通常のエconomic理論は、19世紀の古典的自由主義から継承された時代遅れでしかも理論的には受け入れがたい個人観によって導かれているということである。・・・この本の大きなテーマの一つは、制度、社会慣行、そして「歴史が私たちの考え、知覚、そして行動に及ぼす影響である。・・・本書には、ポストケインズ派(ケインズ自身、ロビンソン)、制度学派(ヴェブレン、ポラニー)、マルクスが影響を及ぼしている。さらに、サイモン(行動主義)、ナイト、シュンペーターなども付け加えられる。まえがき

「社会学、人類学、政治学および心理学においては、いくつかの例外はあるにせよ、主体は新古典派の経済学者が想定しているようには、「合理的」ではないということが国際的に合意された見解になっているように思われる。合理性の正当な「経済学」的基準は、このように他の分野では通例拒否されている。まえがき

「もっとも重要なことは、新古典派政党にとってかわる急進的理論は、人間主体の代替的な理論の構築なしにすまずことはできないということである。そして、この人間主体の代替的理論は、社会関係や制度の経済的文脈と関係づけられたものでなければならないということである。

新古典派に対する批判

- ① 最大化合理性の仮定を疑う
- ② 経済現象を均衡ではなく進化的で動的な過程と見る
- ③ 経済的・社会的制度の重要性

以上の三つの問題点はお互いに関連しているだけでなく、三つとも「情報」と「知識」に関わる問いかけを含んでいる。完全知識の過程を拒否し、情報問題を無視しないこと。さらに、「不確実性」と「複雑性」への関与。5

(人間の)認知的・大脳のプロセスは、サイモンのいう限定された合理性の概念で表される以上に複雑であり、諸種のレベルで生起していると考えられる。・・・このことから、「習慣的で部分的にしか熟慮されていない行為が、知識と技能を保存しそれを社会に広める働きをしている」ことに我々の関心をむけなければならないことを意味している。9 ヴェ

ブレンは、制度を「人々の総体に共通なものとして定着した思考習慣」とみなしたが、これは経済生活における習慣的行為の重要性を強調したものである。ヴェブレンを継承してわれわれは社会制度を以下のように定義できる。それは「伝統、慣習ないし法的制約によって、持続的かつ定型化された行動パターンを作り出す傾向のある社会組織」である。高度に複雑で、ときとして変動的な世界において社会科学が適用可能なのは、この社会的制度がもたらす持続性と定型性に他ならない。9

社会的制度のこのような理解は、人間の活動が社会的制度によって完全に動機付けられるという機械論的、決定論的な見方に与することではない。・・・人間の思考過程について多層的でないし多層的な見方（大脳プロセスの複雑性と多層性）を採用すれば、「人間のよ様な目的をもつ主体は、目的を変更することができ、またこの変更を外部からの刺激なしに行いうる」ということが認められなければならない。行為主体について、その目的と行為の双方が外部環境によって決定されておらず、真の選択に直面しているという見方をとっているのは、オーストリア学派だけである。10

本書で採用されているのは、外部の影響力は個人の目的と行為を鋳型にはめるが、行為はそれによって全面的に決定されているのではないという見方である。環境は個人の判断や行為を完全に決定するものではない。要するに、行為は部分的に決定されていて、部分的に非決定的である。部分的に予測可能であるが、確立や危険の計算についてすら、部分的には予測不可能である。・・・経済過程の将来を、もっともラディカルな意味で、不確実にするのは、こうした行為の予測不可能性である。経済は、その行動が部分的に非決定的な人間から成り立っているから、未来を完全に予想することはできない。未来は本質的に非決定的であり、知りえないものである。11

〈個人の嗜好や選好、技術などを経済システムの一部として取り込み、経済学が解明すべき問題に含めること〉

ハイエクは、意識的行為の源泉の説明を経済学から心理学の仕事に移した。新古典派の生産関数は、技術を物理的問題とみなし、技術が労使関係や企業内部の作業組織と関係していることを無視している。このようなアプローチからは、「長期的な技術の発展と変化の理解について有意義な前進は得られない」「個人の嗜好や生産技術は、時間を通じて変化する」本書では、〈社会・経済システム〉という用語を、経済（技術も）が全体としての社会における一群の社会的・政治的諸制度から分離させることができないという事実を強調するために用いる。・・・本書のシステム論の見方は、本質的に進化的であり、進行中の過程や動態的变化を重視するものである。14-16

〈一般均衡論とシステム論の差異〉

新古典派一般均衡理論がシステム論的見方の完成を表しているというのは誤謬である。それは確かに、個人の選好と生産活動を決定する多数の関数が相互に作用しあうという経済システム観を持っている。しかし、それは経済を自律的な主体間の資源配分を支配する交換システムとして考察している。(ルーマンの社会システム論??) ここでは、生産はブラックボックスにされ、技術や個人の選好は視野の外に置かれている。それはシステム論的アプローチの、一つの表現であるかもしれないが、きわめて限定され、不十分なアプローチである。・・・われわれは「嗜好と技術をとりこみ、自然界に開かれているシステムとして経済を見る必要がある」17

ミーゼスその他のオーストリア学派の人々は、個人の目的の決定や形成の問題を視野の外に置くことで、制度の問題を視野の外においている。・・・しかし、個人が目的を決定ないし形成する場合に制度的ないし社会的要素を心理学的要素ともに視野に入れる必要があるという議論は、(今日) 広く受け入れられている。・・・さらに、制度的構造や枠組み、また社会的規範と文化といった要因は、私たちのその時々^のの行為に影響を与えているだけではなく、私たちの世界観や追求する目的にも影響を与えている。66

〈構成主義＝方法論的個人主義批判〉このような制度主義の立場からでてくるのは、「マクロ経済学をミクロ経済学に解消する」のとは逆に、社会制度や文化の考察をふくめたマクロ的基礎の上に、ミクロ経済学を位置づけるというアプローチであろう。71

(例えば、ハイエクのような) 方法論的個人主義に対して、「全体は部分の合計以上のものである」と批判するだけでは十分ではない。(この批判はすでに彼らの主張に織り込まれている) 本当の論点は、情報などの投入が外部からなされた後に、部分はその内政的特質(効用関数)にしたがって機能するだけなのか、ということ、部分を全体との関連のなかで局部的に構成しているようなもっと複雑な決定の網が存在している可能性があるということである。社会における基本要素は、抽象的個人ではなく、社会的個人、すなわち、社会の内部を構成し、かつ社会によって構成される存在としての個人である(これもまた、複雑系の考え方につながる)。・・・われわれは、「経済学、あるいはもっと一般的に、社会科学の分析において、個人とその選好を出発点とすることに警戒的な態度をとるべき」理由がある。72、74

〈経験主義、実証主義、道具主義批判〉

経験主義を拒否するのは、「科学において経験的な研究は価値がない、科学の発展にとってデータ収集と分析が無価値である」と主張することではない・・・言いたいことは、「いかなる観察も観察者の概念的枠組み、言語および理論体系から独立ではありえない」したがって、「社会的および自然的世界の観察者としての私たちの理論ないし概念から独立に知覚

される〈事実〉なるものは存在しないということである。〈事実が自らを語る〉ような中立的かつ客観的な経験的研究が存在するというのは夢である。ただし、我々は、〈事実や理論が純粋に主観的な性格をもつ〉という（ハイエクの）主観主義に陥ってはならない。

合理主義あるいは最大化仮説について

合理性仮説＝最大化仮説は、主流派経済学の堅固な核の一部である。〈合理性〉は、新古典派のそれ自体を教条的で不動のものにする基本仮設の一つである。79

最大化仮説に対する批判

最大化仮説に依拠する企業の適者生存論は、新古典派の中に突然変異や遺伝子のメカニズムに相当する理論が含まれていないために、そのまま経済学に移植することはできない。行為主体は、自分の選択の将来の結果を知っているという仮設だけではなく、自分自身の選考の内容を知っていると想定すること自体すでに非現実的である。ライベンシュタインの「X非効率」の理論は、不確実性と無知の世界で非効率を最小化するような方策を推薦するという点で一貫性を欠いている。サイモンの限定合理性の理論は、取引費用仮説を介して、最大化仮説の一変種に転換されてしまう。84

これは次のようにも言い換えることができる。「行動主義モデルは、行為主体は政策的結果の組み合わせに焦点をあて、それをある種の合理的計算に従属させると想定している。合理性は限定されてはいるが、なお計算的な合理性であり、正統派モデルから大きくはずれるものではない。106

ただし、新古典派では均衡と全般的合理性とは密接に結びついており、限定合理性を受け入れてなおかつ一般均衡分析が維持できるかどうかは疑問である。・・・センスデータの複雑さと豊富さの問題と、それを処理する人間頭脳の計算能力の制約は、本書の議論にとって核心的な重要性をもつ。さらに、本書では、情報は複雑で非均質的であり、車間的解釈に委ねられ、全般的な合理的計算は不可能であるという立場をとっている。85 88

制度学派は、均衡中心の理論化を拒否し、経済過程における知識の問題をはっきりと重視している点で、(新古典派とは)別個のものである。まえがき、注3

情報と知識の問題について経済学者の関心が高まったのは、オーストリア学派の貢献である。かれらは、これらの問題を正當にも正面にすえ、通常の理論に批判的作用を及ぼした。しかし、かれらは、知識と期待の主観的な性格にこだわり、そうした議論を超個人主義的な結論を支持するために用いている。・・・かれらの議論の方向は正しいが、受け入れがたいほど主観的な傾向をもっている。情報と知識が主観的で個人的な特質をもっていることは容認されるにせよ、それらの獲得にあたって用いられる概念や理論は、純粋に主観的なも

のではない。いかなる情報も知識も、概念や理論から自由ではないとすれば、なにものもその本姓上純粋に主観的とはいえない。・・・認知過程は、本質的に社会的である。それは、社会的な言語と概念の使用を含み、社会的な文化と関連する観念や慣習を反映する。私たちの知覚と知識獲得の機構は不可避免的に社会的であり、不可避免的に社会的な文化や慣習を反映せざるをえない。・・・かくして、情報および知識の重要性の強調は、主観主義ではなく、制度（や慣習などの）認知的・実践的機能の研究にむすびつけられなければならない。

6-7

「人間のような目的をもつ主体は、目的を変更することができ、またこの変更を外部からの刺激なしに行いうる」ということが認められなければならない。行為主体について、その目的と行為の双方が外部環境によって決定されておらず、真の選択に直面しているという見方をとっているのは、オーストリア学派だけである。10

目的と手段の関係についても正統派の二元論は間違っている

経済学は、個人が手段と、手段とは別の目的をもつと想定している。その上で、目的は考察の外に置き、手段には強い関心を向ける。その結果、選択された手段によって目的が変更されたり影響をうけたりするという問題は無視される。要するに、目的が手段を正当化する。・・・これに対して、制度派経済学では、目的と手段の絡み合いとその程度および方法は重要な事柄である。・・・目的は常に完全で明確とは言えず、往々にしてその細部は完全情報による手段選択を不可能にする複雑なものである。「現実の状況においては手段を目的からはっきりと切り離すことは一般に不可能である」（サイモン）

手段と目的を峻別する哲学的基礎は功利主義から来る。すべての価値判断は目的に関わるとした上で科学から排除し、科学のたずさわるべき問題をもっぱら手段の実証的、価値自由な法に委ねることになる。98-99

経済人のあらゆる行為が合理的計算によって統御されている、という命題を否定しても、新古典派の枠組みをいじできるであろうか???新古典派では、(フリードマンが部分的に行ったように) 合理的熟慮の公準を中心からはずせば、理論の核心をなす選択の概念の一貫性が損なわれる。これが、新古典派が〈事実上の〉合理的計算者としての経済人の概念に固執する理由である。105

第八章 制度としての市場

これまで、経済学は市場について満足の行く定義を与えることに成功してこなかった。

市場は、所有権の設定や毛約の判定にかかわる法的事項だけではなく、運送や市場関連情報の伝達にもかかわる社会的制度の広範な組み合わせとして把握される必要がある。・・・

一言で言えば、市場は組織化され制度化された交換である。この意味で市場は、価格についての合意を調整・確立することを助け、より一般的には、生産物、価格、数量、潜在的な買い手と売り手に関する情報を伝達することを助ける諸制度である。(したがって、市場は個人間の双方向的な交換の単純な集合であり、所与の個人的選好と目的の反映であるという見方は成立しない) 187 190

ただし、市場は、他の社会制度と同様に、個人の行為を可能にする機能と制約する機能の双方をもっている。市場=自由、制度=制約という二分法は成立しない。さらに、市場は本質的に社会的・集团的側面を含み、純粋な個人主義と完全には両立しない。市場参加者は、市場の中で完全に自由にふるまうことはできない。市場参加者は、〈市場のコンヴェンション、定型的行為、規則の作用などによって、特定の行動をとるように〈強制〉される。191

市場を個人の自由と結びつけ、人間の相互作用の普遍的範疇として取り扱う、さらに、人間の社会的行為を一般的に「交換」というが概念に包括する思想、これらは正統派の市場概念のイデオロギー的偏向を表している。191

市場はなぜ存在するかという〈問い〉

・・・市場の重要な存在意義は、それが制度として、交換に対して、促進的であると同時に制約的、強制的に機能しているという点にある

コースは、市場が交換過程に関連した数種類の取引費用を上げているが、これらの費用や困難のすべてが、制度化された市場では非市場的交換に比べると軽減されるという問題の重要性に着目していない。・・・コースの議論は、一定の状況のもとで企業が市場に対して優位にたつことを説明する(ただし、かれによれば、企業の優位は企業の規模に関する収穫逓減によって限界付けられる)が、同一の議論が構造化の低い交換に対して市場が発揮する優位の説明にも利用できることを見落としていた(ただし、市場に関しては規模に関する収穫逓減が存在するという明確な証拠は見つかっていない) 193

新古典派の市場理論は〈制度〉なしに機能するか???

レオン・ワルラスは有名な〈せり人〉(機械仕掛けの全知の神というフィクション)を持ち出すことで、純粋なエーテルとしての市場概念が成立しないことを告知している。・・・さらに、ある財の市場で供給が需要を超過した場合に価格が自動的に低下する必然性はない。現在の価格がノーマルであると多くの市場参加者が考えているとすれば、価格は弾力的には下落しない可能性がある。・・・市場が作動するためには、経済主体の心と実践のなかにノルムを成立させるメカニズムが必要である。・・・ロンドン株式市場はきわめて秩序だった制度である。すべての取引が個別のかつ独立に値決めされるのではなく、

価格は3ダースに満たない〈市場構成員〉によって定期的に値決めと調整が行われ、この情報がコンピュータを通じて株式仲買人に伝達される。かくして「関係者相互の取引は、判然として社会的構造的なパターンを示している」「激烈な価格変動がおりうるような潜在的に不安定な市場においてさえ、取引は構造化されており、価格の予想とノルムの形成を助けるように情報が選択的に提供されている」195 197

「市場の内部あるいはその周囲に広がる制度の網の目は、他の経済主体の潜在的な行動についての情報を提供するメカニズムである（ハイエクを見よ）。・・・「制限的規則やコンヴェンションがあった方が、市場はより多くの情報を行為主体に提供することができ、その活動も効果的になる。・・・完全に競争的で「自由な」市場システムという考えは、達成不可能な右翼的ユートピアに過ぎない。204

価格ノルムの非定常性（不可逆性）

価格ノルムは、あらゆる調整を経た均衡状態を表すものではない。したがって、価格には長期の定常状態は想定できない。価格は時間的過程の産物であり、不可逆的である。（均衡から乖離した価格が自動的に均衡に立ち返る必然性は存在しない）

〈完全競争のパラドックス〉

新古典派の完全競争が存在するとしてもそれは持続し得ないことをはっきりと示したのはリチャードソン（1959）である。投資のインセンティブは、供給の摩擦、利用可能な機会や情報の制限などから発生する。競争が完全であれば、このようなインセンティブは生まれない。「誰でも知ることができ、だれでも利用可能な機会は、だれも利用することができない」すべての市場参加者が完全知識をもてば、完全知識は役に立たなくなる。・・・したがって、市場システムが機能するためには、ある程度の摩擦、不完全性、制約が存在しなければならない。・・・硬直性や制約が経済システムの内部で機能的な役割を果たしていることはケインズによって指摘されている（たとえば、貨幣賃金の硬直性には一定の役割が認められている）が、ケインズはこの問題を十分に展開していない。・・・かれのミクロ経済学は大部分限界主義的な基礎にとどまっている。201-203

ただし、不確実性の概念はケインズの中で中心的な位置を占めており、その意味で彼の著作は、古典派的伝統からの断絶とみなされるのである。297 注8

〈ゲーム理論の可能性と限界性〉

経済的制度やノルムの研究において、ゲーム理論はどのような役割を果たしうるか???

「ゲーム理論では、行為主体は最大の利益を得ようとして、異なった戦略の選択を行う。主体のモデルは、なお最大化をめざす〈経済人〉である。ただし、その選択はかならずしも決定論的ではない。・・・ゲーム理論は社会制度の経済理論の十分な基礎付けにはなりえ

ない。ゲーム理論は最大化行動をとる経済人という仮定を放棄しないかぎり、制度やコンヴェンションの動的機能を十分に反映することはできない。ゲーム理論は、行為主体が関連する情報のすべてを利用でき、最適戦略を決定するとい想定する（言い換えると、ゲーム理論では不確実性は中心的な役割を占めない）が、そのような全体的計算は不可能である。そして、その〈不可能性〉から制度の重要な機能（不確実性のもとで個人の選択や行動を助ける）が生まれるのである。205

一般に、ゲーム理論モデルでは、行動に関する確率分布は、限界主義的で非線形的な仕方ではないにしても、なお決定されている。そのために、人間行動の創発性や非決定性については、限定的にしか視野にいれていない。207 注 13